

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520068

研究課題名(和文) 『知識論決択』における法称の論理学の解析 法上の梵文注釈に基づいて

研究課題名(英文) Analysis of Dharmakirti's logic in the Pramanaviniscaya -- on the basis of Sanskrit manuscript of Dharmottara's commentary

研究代表者

岩田 孝 (IWATA, TAKASHI)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：80176552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：法称(7世紀中葉)の論理学の特質を理解するためにPramanaviniscaya(『知識論決択』)での論理学の基本的見解を要約した。法称は同書において陳那の論理学の新たな解釈を述べている。本研究では、主張命題の定義に関する法称の解釈に焦点を合わせた。その際にはダルモッタラの梵文写本注釈を拠り所とした。仏教哲学の後期の展開の解明に法称の論理学の研究成果を応用しつつ、サハジャヴァジュラ(11世紀頃)のSthitisamasa(『定説集成』)における瑜伽行派の定説を論じ、知識が形相を有するという有形相知識論と知識が形相を有しないという無形相知識論を説く二つの瑜伽行派の理論的な相違点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In order to understand the characteristic feature of the logic of Dharmakirti (c. 600-660), I first summarized his basic idea in logic in the Pramanaviniscaya (Determination of the means of cognition), in which he makes new interpretations of Dignaga's logic. In the present study, I focused on the elucidation of Dharmakirti's new interpretations regarding the definition of thesis (paksa). Furthermore, I based the elucidation of this definition on the Sanskrit manuscript of Dharmottara's commentary. Applying the study of Dharmakirti's logic to later developments in Buddhist philosophy, I addressed the positions and practices of the two Yogacara school in the Sthitisamasa (Summary of positions) written by Sahajavajra (eleventh century). Furthermore, I clarified the theoretical differences between the Yogacaras who advocated the position that cognition has forms and the Yogacaras who advocated the position that cognition has no form.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 仏教学・仏教史全般

キーワード：他者のための推論 主張命題の定義 有形相瑜伽行派 無形相瑜伽行派

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象である法称の主著 *Pramanaviniscaya* の解明は、1960年代に、いわゆる「古典」となり得るドイツ語訳研究を上梓するという計画をもって始まった。フェッター博士(ライデン大学名誉教授)は、第一章(直接知覚章)を担当し、シュタインケルナー博士(ウィーン大学名誉教授)は、第二章(他者の為の推論章)を担当した。その研究成果(1966年と1979年に発表された翻訳研究)により、法称の認識論の梗概と法称の論理学の特色(妥当な論証因が三種類に限られるという特色)が明らかにされた。残る同書の第三章(他者の為の推論章)(以下、Pvin III と略記)のドイツ語訳は、筆者の担当となり、最初の部分のドイツ語訳研究を、1990年代から、ウィーン大学の *Wiener Zeitschrift* に四本の論文の形で発表した。これまでの研究では、梵文原典が発見されていなかったため、西藏語訳に基づいて翻訳研究を行ってきた。2011年にヒューゴン博士と苫米地博士による第三章の梵文校訂版が上梓された。本研究では、これら新たな梵文資料を用いて、主張命題の定義の部分の解読と分析を進めた。

2. 研究の目的

印度の諸学派はそれぞれ異なる定説を提唱し、その定説の相違は、互いの哲学を質的に向上させてきた。一方で、同一な主題に関して諸定説が相違することは、どの説が妥当性を有するのかという問いを立てる契機ともなった。妥当性を問題とするには、論題となる事柄を同一の土俵に乗せ、しかも、その事柄を証明するための論述の作法を共有することが必要となる。仏教の学匠である法称は、陳那(Dignaga c. A.D. 480-540)の説を拠り所としながら、論理的記述の枠組みとして推論なる土俵を設定し、そこでの論述のルールを提唱した。そのルールを明示したのが *Pramanaviniscaya* の第二章(自己の為の推論章)と第三章(他者の為の推論章)である。この第三章では、法称は、立論者が自らの主張を妥当性のある形で証明するためにはどのような条件が必要なのかという問題意識をもって、他者のための推論の定義、主張命題の定義、帰結を論証する論証因と帰結との関係などを詳説している。本研究では、同書の第三章の梵文テキストとそれに対するダルモータラの梵文写本註釈の解読を通して、主張命題と論証因に関する法称説を明らかにする。更に、法称の定説が後期大乘仏教に与えた影響を考察する。具体的には、後期大乘仏教の学匠であるサハジャヴァジュラの著書(梵文写本 *Sthitisamasa*)における瑜伽行派の定説の解読を行う。これが本論の目的である。

3. 研究の方法

法称の *Pramanaviniscaya* の第三章 (= Pvin

III) の解読に際しては、ダルモータラの梵文注釈写本を校訂しつつ、原典の論理的分析を行った。2013年の夏には、ウィーン科学アカデミーに滞在し、主張命題の定義の節についてのドイツ語訳と注記の草稿を作成した、そして、クラッサー博士、シュタインケルナー博士、ラジッチ博士との読み合いを通して、草稿を推敲した。梵文注釈写本の解読に際しては、オーストリア科学アカデミーのヒューゴン博士と共に、テキストの校訂を進めた(2011年5月、早大にヒューゴン博士を招聘)。

サハジャヴァジュラ作の *Sthitisamsa* における瑜伽行派の定説を解読するに際しては、西藏語訳を参照しながら、梵文写本の校訂を行った。梵文写本を校訂するために、オックスフォード大学のサンダーソン博士と共にテキストの読み合わせを行った。

4. 研究成果

(1) インド仏教においては、7世紀中葉に仏教論理学の基盤が形成された。その基盤の一つとなったのが法称の主著 *Pramanaviniscaya* である。同書の第三章では法称の論理学説は極めて簡略化された形で記述されているので、内容を把握することは容易ではない。法称の論理学の全体像を捉えるために、法称の推論説に用いられる主要な概念を明確にした(「論理学 法称の論理学」『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』東京、2012)。

(2) 他者の為の推論に用いる論理的用語の中から、「主張命題」を取り上げ、法称の規定した「主張命題」の定義の内容を考察した。法称はその定義を次のように述べている。主張命題とは、「自らの在り方にてのみ説示されるべきもの[つまり、証明されるべきものとしてのみ説示されるべき命題]であり、[立論者]自身にて[所証であると]意図されているものであり、[しかも、直接知覚や推論などによって]否定されないものである」(Pvin III 6ab)と述べている。更に、法称は、この定義に用いられた諸用語「自らの在り方にて」、「のみ」、「自身にて」、「意図されている」、「否定されない」という用語

には、それぞれ固有な役割があることを具

体的な命題例を用いて詳論している。例えば、主張命題とは立論者に「意図されている」命題である、という用語は、主張命題において表現されていない事柄であっても、立論者によって証明されることの意図されている事柄は主張命題に含まれる、ということをも可能にする働きを有している。当時、サーンキヤ学派などの他の学派は、自らの意図する特定なことを隠した、意味を限定しない曖昧な主張を主張命題とし、その見せかけの主張を証明することにより、隠していた自らの意図の入った命題も成り立つ、という偽証を行っていた。これを批判するために、立論者の意図をも含めた命題を吟味することにより、その命題が論理的に成立しないことを示している。こうした他学派の偽証を批判するために、「立論者が証明しようと意図したことは直接表現されていなくても主張命題になる」という役割を「意図された」という用語に付与している。本研究では、基礎作業として、これら主張命題の諸用語の役割を論じた法称の梵文テキストを精読し、ドイツ語の訳注研究の草稿を作成した。推敲の精度を上げるために、シュタインケルナー博士、ラジッチ博士と共に草稿を読み直している所である。法称の Pvin III における論理学説は、陳那の説に依りつつも、法称の独自な見解を随所で展開している。Pvin III の梵文テキストとダルモッタラの梵文註釈写本との解読により、法称の新たな展開と解釈が明らかになるであろう。なお、本研究では、陳那の論理学の基本である九句因説と法称の本質的結合関係に基づく論証因説との相違点を文献的に考察することをも予定していたが、法称の論証因についての見解の分析までには至らなかった。この課題については次の研究において取り組む予定である。法称の主張命題の定義に用いられた用語の一つである「否定されない」という用語の役割について分析を行った。「否定されない」

ということは、主張命題は、直接知覚・推論・信頼に値する人・世間上承認されたことによって否定されない、という規定である。本研究では、「主張命題は、世間上承認されたことによって否定されない」という規定の役割についての法称の見解を分析した。この見解は、世間での承認によって否定されるものは、主張命題にはならない、ということの意味する。つまり、常識的ではない主張は、世間での承認によって拒絶されるので、主張命題にはなり得ない、ということになる。例えば、「懐兎は月ではない」という常識的ではない命題は、世間で承認されている「懐兎は月である」という命題によって否定されるので、主張命題にはならない、という如くである。この文脈では、世間で承認された命題はそれに反する主張を拒絶する要因となる。しかし、世間での承認が常に真であるというわけではないので、世間での承認は如何なる条件の下で拒絶要因となるのか、ということも吟味する必要がある。陳那は、この問題を意識してはいたが、その対処についての詳しい説明を行っていない。一方、法称はこの問題を主張命題の定義の節において取り上げ、詳しく論じている。即ち、「世間での承認に対立する」命題を証明する推論がないという条件の下で、世間承認がそれに対立する命題を拒絶する要因となるという第一解釈と、「世間で承認された」命題を証明する推論がないという条件の下で、世間承認が拒絶する要因となるという第二解釈を導入している。論文では、第一解釈の拠り所となる考え方を分析した。その結果、法称は、任意の言葉によって指示対象（分別知に顕れる形相）が表現されるという説を第一解釈の拠り所としていた、ということも明らかにした。更に、世間上承認されたことを確定するのは推論である、という見解に立っていたことを明らかにした。（「世間上承認された命題による対立命題の否定の可能性」『奥田聖應先生頌寿記念 イ

ンド学仏教学論集』東京、2014）。

(3) 法称の論理学説の応用として、後期大乘仏教の密教の学匠であるサハジャヴァジュラ (Sahajavajra) の Sthitisamasa における瑜伽行派の定説を理論的に分析した。

無形相知識論瑜伽行派における六波羅蜜の実践の意義を叙述した部分の梵文写本を解読し、和訳注を作成した。オックスフォード大学のサンダーソン博士と共に、写本の読み合わせを行い、英文の訳註研究の草稿を作成した。これらの成果に基づいて、無形相唯識説での教理と実践の分析を行った。その内容は以下の如くである。サハジャヴァジュラは、無形相知識論瑜伽行派の定説の説明においては、外界の対象が存在しないことを証明し、外的対象と見なされるものが知識の形相としても存在しないことを証明する。これによって、外的対象がなく知識に形相もないという無形相唯識説が成立することを示す。次に、すべては形相のない唯識であることを体得するためのこの瑜伽行派の実践として、六波羅蜜からなる行を説く。そこでは、方便に相当する布施などの波羅蜜の三輪清浄の実践と、智慧としての三慧（聞所成慧・思所成慧・止観からなる修所成慧）の実践を述べている。その無形相唯識説に立つ実践を示す典拠として『楞伽經』の偈文（LA X 256-258）を援用する。更に、四諦と三性説を結び付けて苦とその滅を示し、苦（世間のものごと）の滅を無形相なる唯知と捉えている。（『定説集成』（Sthitisamasa）和訳研究 無形相知識論瑜伽行派の定説（4） 無形相知識論瑜伽行派の唯識説と実践 』『東洋の思想と宗教』30（2013））。

サハジャヴァジュラの実践説の思想史的背景を調べるために、同学匠の『真実十偈釈』（西藏語訳のみに残された文献）における修道論の論説を和訳し解析した。これにより、サハジャヴァジュラが顕教の修道論の基

礎にカマラシーラ (Kamalasila) の『修習次第』の論説を据えていたことを明らかにした。これは、『定説集成』の瑜伽行派の実践の解読に大いに役立った。（『サハジャヴァジュラの波羅蜜理趣での修習論 』『真実十偈釈』（Tattvadasakatika）和訳研究（ad Tattvadasaka 5d-6） 』『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集』東京、2013）。

Sthitisamasa における無形相知識論瑜伽行派の定説の分析に続いて、有形相知識論瑜伽行派の定説の分析を行った。無形相知識論瑜伽行派では、知識は、本来的には、青などの形相を有しない、しかし、錯乱の故に知識は異なる形相を有するが如く現れる、ということが定説であった。それに対して、本節の有形相知識論においては、青などの形相は、顕現するが故に、知識である、知識の形相として存在する、ということが定説である。その論拠は、「顕現するものは知識である」という論理的包摂関係である。サハジャヴァジュラは、この包摂関係を論拠とする論証式を構成し、それによって、知識の有形相性を論理的に整備した形で説明している。これは彼の有形相知識論の記述の特色である。但し、知識が形相を有するとは言っても、知識が所取と能取る分別相の顕現を有する、というわけではない。何故ならば、知識は、それ自身に顕現している形相を自己認証するので、分別相を離れているからである。こうした有形相なる知識、しかも、多様かつ不二なる知識を観想するべきである、とサハジャヴァジュラは説いている（『定説集成』（Sthitisamasa）和訳研究 有形相知識論瑜伽行派の定説（5）』『東洋の思想と宗教』31（2014））。

この11世紀のサハジャヴァジュラが叙述した Sthitisamasa の梵文写本の解読により、法称などによる認識論と論理学の諸説が後の後期大乘仏教の顕教の教理と実践にどの

ように受け継がれたのかを知ることが可能となる。その意味で、同書の解読研究は、仏教哲学の思想的な展開の一つの在り方を捉えるための契機となると言えよう。

なお、平成20 - 22年度の基盤研究(B)研究課題「仏教論理学と後期大乘仏教への展開」の成果として提出した以下の論文が平成23年に発表された。

Iwata, Takashi. "Compassion in Buddhist Logic - Dharmakirti's view of compassion as interpreted by Prajnakaragupta." In Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis - Proceedings of the Fourth International Dharmakirti Conference Vienna, August 23-27, 2005. Ed H. Krasser et al., Vienna 2011, 211-230.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

岩田 孝 『『定説集成』(Sthitisamasa) 和訳研究 有形相知識論瑜伽行派の定説(5)』『東洋の思想と宗教』(早稲田大学東洋哲学会) 査読有 31 (2014): 22-51.

岩田 孝 『『定説集成』(Sthitisamasa) 和訳研究 無形相知識論瑜伽行派の定説(4) 無形相知識論瑜伽行派の唯識説と実践』『東洋の思想と宗教』(早稲田大学東洋哲学会) 査読有 30 (2013): 1-33.

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(分担 計 3件)

奥田聖應先生頌寿記念論集刊行会、佼成出版社、『奥田聖應先生頌寿記念 インド学仏教学論集』、2014、1156、(寄稿)岩田 孝「世間上承認された命題による対立命題の否定の可能性」pp. 707-724.

伊藤瑞叡博士古稀記念論文集刊行会、『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞叡博士古稀記念論文集』、山喜房佛書林、2013、1165、(寄稿)岩田 孝「サハジャヴァジュラの波羅蜜理趣での修習論 『真実十偈釈』(Tattvadasakatika) 和訳研究 (ad Tattvadasaka 5d-6) 」pp. 767-781.

桂紹隆等編集、春秋社、『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』、2012、294(分担執筆)岩田 孝「論理学 法称の論理学」pp. 121-153.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 孝 (IWATA, Takashi)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 80176552

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: